

プロサッカー選手の引退後の大学教員へのキャリア 移行に関するセルフスタディ：

教職アイデンティティの形成に関わる実践知を手がかりにして

田 中 奏 一* (京都先端科学大学)

金 高 宏 文 (鹿屋体育大学)

濱 中 良 (京都先端科学大学)

A Self-Study on the Career Transition of Professional Soccer Players to University Faculty:

Practical knowledge Related to the Formation of Teacher Identities

Soichi Tanaka¹⁾, Hirofumi Kintaka²⁾ and Ryo Hamanaka¹⁾

Abstract

This study aimed to provide insights to facilitate the smooth career transition of professional soccer players after retirement, using a self-study based on the primary author's experiences.

The primary author, a former professional soccer player, successfully developed a strong teacher identity by gradually engaging in both research and education while maintaining identities as an athlete and coach. Transitioning to a university faculty position requires long-term career planning, and it is crucial to form a solid foundation for a teacher identity that compensates for the loss of athletic identity after retirement. The career services provided by the J-League can be instrumental in this process.

Further research is needed to examine more cases of professional soccer players transitioning to teaching careers, incorporating a broader perspective that includes athletic experiences.

Key words: soccer, self-study, dual carrier, second career, university faculty

I. 研究の背景と目的

日本人アスリートの国際的な存在感の向上もあいまって、国内のプロスポーツは10年以上前の企業スポーツが主流であった時代に比べて、アスリートの待遇も向上している。しかし、プロで長年競技に専念してきたアスリートの多くは、引退後の生活に対する十分な準備がなされておらず、多くのアスリートは厳しい現実直面する(望月・横山, 2005)とされている。コメンテーター

などメディア業界で華々しく活躍できるアスリートもいるが、それも僅かであるし、現役時代からセカンドキャリアが保証されているアスリートは一握りしかない(光岡, 2014)ことが現状である。アスリートは、スポーツ環境という特殊な環境に身を寄せ、社会生活における諸々の可能性や選択を留保していることが多く、引退後の移行は、様々な困難や問題を伴う場合もある(大場・徳永, 2000)。そのため、アスリートは、競技引退を通じて「何を」「どのように」獲得し、そしてそれを引退

* : 責任著者 soichi.taichi4539@gmail.com

1) *Kyoto University of Advanced Science*

2) *National Institute of Fitness and Sports in Kanoya*

後の生活においてどのように生かしていったのかを検討した上で専門的介入方略を考案することが求められるようになってきている(豊田・中込, 2000)。

そのような中、サッカー界においては、Jリーグで長く活躍した選手が選手引退後に大学教員へと移行しているケースも散見される。プロサッカー選手が引退後に大学教員に就くためには、キャリア移行でどのような苦悩があり、乗り越える必要があるのだろうか。飯尾ほか(2023)は、元サッカー選手が引退後のキャリアとして高等学校の教員という職業選択に至った意思決定に影響を与えた要因を検討しているが、プロスポーツ選手の高等教育機関である大学の教員へのキャリア移行を検討した研究は少ない。キャリア移行の研究では、すでに引退を経験したアスリートに対して事例的にアプローチすることが、引退に直面した複雑かつ多次元性に富んだ問題を解決していく糸口を提供してくれる(豊田・中込, 2000)とされている。そのようなことから、アスリートの困難克服の道筋についてアスリートの現実的な様子に基づいて検討することは有意義(吉田, 2006)といえる。一般に、プロサッカー選手がキャリアを送る上でどのような出来事と苦悩があるのかは理解することは難しい。よって、事例的な検討が必要であると考えられる。

教師教育の研究手法として、近年、多く用いられているのがセルフスタディという手法である。セルフスタディでは自己言及する研究の特性上、自分自身の置かれた状況や文脈、直面した葛藤についての記述が欠かせない(大坂ほか, 2022)。これらを内省的に分析することで、他の研究手法では獲得できない深い洞察が得られると考える。セルフスタディの実践者となるためには、個人でその対象となる実践と研究を進めることが前提である(濱本, 2021)。筆頭著者は、大学卒業後、11年間プロサッカー選手として活動し、引退を経て現在は大学教員として採用され、元プロサッカー選手として自身の経験を回顧し、研究手続きを踏んでまとめることができる。元プロサッカー選手によるセルフスタディを用いたキャリア移行に関する研究はなく、引退後のキャリア移行に大学教員を志望するプロサッカー選手のヒントとなると考えられる。

また教員に関する研究においては、職業を通じて自身を自覚する主観的感覚の職業的アイデンティティ(Erikson, 1959)という概念の内、教師という職業が持つアイデンティティを指す教職アイデンティティ(劉, 2016)にしばしば焦点が当てられる。今日、教員に対する信頼や権威は失われている傾向にあるため、教員はアイデンティティがゆらぎやすく(山田・長谷川, 2010)、着実な教職アイデンティティの形成なくして勤まる職業

ではないといえる。高橋・重野(2010)は、プロサッカー選手は引退時に「役割」を失うことで選手の「アイデンティティ」を失うことを問題点として挙げている。プロサッカー選手のキャリアでの出来事を、どのように捉えて行動し、失った職業としてのアイデンティティをいかにして着実に形成することができるのかの実践知、特に、何をどのような順序で行うのかを指す「段取り実践知」(金子, 2002)が呈示できると、これから教員へのキャリア移行を考えるプロサッカー選手にとって有用な知見となるだろう。

そこで、本研究では、筆頭著者自身が対象事例となるセルフスタディの研究方法を用いて、プロサッカー選手が大学教員へのキャリア移行する際に得られた実践知を整理するとともに、対象者の教職アイデンティティ形成について検討することとする。

なお、本研究のキャリア移行は、家庭教師や指導者を含む「教師」としてではなく、学校に勤める「大学教員」へのキャリア移行を対象としている。また、キャリアに関する主要な職業の移行を論じるにあたり、本研究では「大学教員」を大学の常勤教員として扱う。筆頭著者と共著者の勤める高等教育機関である大学は、小学校、中学校、高校とは異なり、研究と教育を行う教育機関であり、大学教員もこの双方の能力が求められる(羽田, 2011)。そのため、教職アイデンティティを、「大学」の「教員」という職業における、社会との関わりの中で自己を認識する構造(Erikson, 1959)、すなわち、研究者と教育者としての自覚と限定的に定義し、研究を進める。

Ⅱ. 研究方法

・対象者

本研究の対象者は、筆頭著者自身(分析時年齢: 34歳)である。筆頭著者は、K1大学では経営学を専攻し大学卒業後、2012年にJ2リーグ所属クラブに入団し、6年間在籍し退団。2018年にJ3リーグ所属クラブに入団し、3年間在籍し退団。2021年にJFL所属クラブに入団し、2年間在籍した後、解雇通告を受け引退した。教員へのキャリアに繋がる沿革としては、プロ4年目の2016年に経営学のO大学大学院博士前期課程に入学、2年間で修士号(経営学)を取得し修了した。プロ9年目の2020年には体育学のK2大学大学院博士後期課程に入学、4年間で博士号(体育学)を取得し修了した。また、選手活動の傍ら、プロ10年目より所属するクラブのスクールコーチ、11年目より大学の非常勤講師(一般体育科目担当)として勤務をはじめ、11年間の現役生活を終えた後の2023年の1年間は大学非常勤講師(一般体育、一般教養科目担当)とスクールコーチとして勤務し、2024年に

大学の常勤教員（嘱託講師・一般体育科目担当）として入職した。

・方法

本研究では、セルフスタディを用いて検討した。セルフスタディとは自分とは何者かの研究であり、自分の行動の研究であり、自分の認識や思考についての研究である（齋藤, 2021）。実践の改善を目的とし、批判的友人の介入があり、目的にあった多様な手法を用いて、専門家コミュニティの構築を目指すことを特徴とした教師教育研究である（武田, 2019）。

この方法で特に重要なのは批判的かつ協同的に研究を実施することであり、それがクリティカル・フレンドと呼ばれる仲間の存在である（岡村ほか, 2022）。本研究では、共同著者のA氏とB氏の2名をクリティカル・フレンドとして研究を進めた。A氏は、30年以上にわたる大学教員としての長いキャリアを有している。筆頭著者はA氏が所属する大学院に在籍し、研究指導を受けたほか、プロサッカー選手に関する質的研究を共同で行っていた経緯がある。B氏は、中学校や高等専門学校、大学

と、多様な年代で教員としてのキャリアを持つ。筆頭著者の所属する大学で常勤の教員として勤めており、同じ職場で教育研究を行っている。また、両氏ともアスリートから教育者となった教員である。実践知を聞き取る研究においては、聞き手が語り手と同様の経験を積んでいることが役立つ（桜井・小林, 2005）とされている。そのようなことから共同研究者のA氏とB氏は、批判的友人の介入を目的にインタビューアーを務めるクリティカル・フレンドとして適していると考えられる。

・インタビューと分析

セルフスタディは、研究者の問題意識によって方法が設定される柔軟性を持っている（Loughran, 2004）。本研究では、濱本（2021）を参考に、2024年5月から6月にかけてA氏とB氏がインタビューアーを務める非構造化インタビューを3回（2024年5月9日、6月3日、6月20日）、約1時間ずつ実施した。インタビューでは、まず筆頭著者に関するキャリア年表（表1）を筆頭著者自身が作成し、共同研究者に共有した。そして、共同研究者はキャリア年表を基に、筆頭著者がサッカーを始めたこ

表1 キャリア年表（筆者作成）

時期	年齢 (歳)	西暦	日常基盤 ・所属	サッカーに関する事項	アスリートとしてのキャリア に関わる意識の変化	セカンドキャリア に関する事項	セカンドキャリアに関わる意識の変化
中学	12~15	2004 ~ 2002	T中学校	TクラブU-15に所属	チームメイトのレベルの高さ故に自信の喪失する		
高校	15~18	2005 ~ 2007	K高校	TクラブU-18に所属 高校3年時にレギュラーとして全国大会優勝	最後の大会に出場し優勝したことで自分もプロになれるのではないかと感じる（高校3年）		
大学	18~22	2008 ~ 2011	K1大学	U-20日本代表に選出	卒業後にプロになりたいと考える	学士号を取得	将来、大学に関わりたいたいという漠然とした意識が芽生える
プロ選手	1年目	22~23	2012	J2 Oクラブ	リーグ戦2試合に出場	プロ選手としてやっていけるか不安を覚える	引退後に備えてなにか取り組んだ方がよいのではないかと？
	2年目	23~24	2013		レギュラー選手としてリーグ戦31試合に出場	プロ選手としての自信を得る	引退後について想定することはあまりなくなる
	3年目	24~25	2014		レギュラー選手としてリーグ戦28試合に出場		引退後について想定することはよりなくなる
	4年目	25~26	2015		出場機会が激減 12試合に出場		O大学大学院 博士前期課程を受験 将来大学に関わりたいたいと考え、大学院を調べ始める
	5年目	26~27	2016		14試合に出場		O大学大学院 博士前期課程に入学
	6年目	27~28	2017		解雇通告	まだまだサッカー選手を続けたい	解雇通告を受けて、引退後を意識し始める 修士号を確実に取得する必要性を感じる

	7年目	28~29	2018	J3 Kクラブ	レギュラー選手として リーグ戦30試合出場 リーグ戦2位J2昇格		修士号を取得	修士号を取得した後も、学びを継続したいと思う
	8年目	29~30	2019	↓	リーグ戦12試合出場 リーグ戦21位J3降格		K2大学大学院 博士後期課程を受験	
	9年目	30~31	2020		解雇通告	解雇通告を受けて まだサッカーを続けたいが、 トップレベルを目指すのは 諦める	K2大学大学院 博士後期課程に入学	博士後期課程を通じて初めて研究者としての 自覚をもつ 解雇通告を受けて、サッカーを続けながらも、 セカンドキャリアを進める必要性を感じる
	10年目	31~32	2021		JFL Nクラブ	レギュラー選手として リーグ戦24試合に出場		副業としてNクラブス クールコーチ JFAC級コーチライ センスを取得
	11年目	32~33	2022	↓	JFL優勝Jリーグ昇格 解雇通告 現役引退	解雇通告を受けてまだサッ カーは続けたい気持ちは 残っていた	副業としてNクラブス クールコーチとN大学 非常勤講師	非常勤講師の勤務を通じて教育者として初め て自覚をもつ
引退後	1年目	33~34	2023	民間サッカー スクール		引退を決断後、セカンドキャ リアの方針が決まるとサッ カーを続けたい気持ちはなく なる	民間サッカースクール でコーチとして勤務 副業としてN大学非常 勤講師	大学教員を目指す明確に決める
大学教員		34~	2024	K3大学			JFAB級コーチライ センスを取得 修士号を取得	

ろから現在に至るまでを振り返り、どのように教職アイデンティティが育まれてきたのかを深掘るようにインタビューを展開した。録音したインタビュー内容は速やかに逐語化した。

分析では、教職アイデンティティの形成に関わる事柄を抽出した。抽出した内容について信頼性と妥当性を高めるために、筆頭著者と共著者との間でトライアングレーションを行った（北崎・會田，2018）。

結果の呈示は、インタビュー内容の逐語録を書き言葉に修正した上で引用しながらナラティブを記述することによって、筆頭著者の思考過程を読者が追跡しやすく配慮した（金・弘胤，2018）。そして、プロサッカー選手が大学教員へとキャリアを移行するための教職アイデンティティ形成について検討し考察した。

Ⅲ. 結果

インタビューにおいては、キャリア年表を参考に共同研究者2名より、筆頭著者の大学教員へのキャリア移行に至った経緯を中心に問われた。話の展開によりJリーグのキャリア支援制度についての質問もあった。キャリア移行や教職アイデンティティの形成に深く関わる内容を抜粋し呈示した。（ ）は筆頭筆者が補足した事項である。

大学院（修士課程）の入学経緯について

A氏：Oクラブ（プロ1チーム目の所属クラブ）に入ってから、2015年（プロ4年目）に出場機会が激減し、大学院を調べ始めたとありますが、これはなぜすぐに大学院に行こうとなったのですか？

筆頭著者：もともと（プロ）1年目に全く試合に出場することができなかったのですが、その時に、今まで大学まで部活と大学の勉強を両立してきていたのに、いきなりサッカーだけの生活になりました。それなのに試合に出られなくて、すごく不安になりました。ただ、それが（プロ）2年目、3年目って順調に試合に出られるようになったので、特にその気持ちもスッとなくなったのですが、また（プロ）4年目になった時に、やっぱりこのままじゃダメだと思いました。サッカーだけをやっていてもというか、サッカーはもちろん全力でやるけれども、並行して何かほかのことを進めないと、サッカーが無くなった時に、僕は何も持っていないなというのをすごく感じて、大学の時にすごく影響を受けたので、大学に関わりたいたいと大学院について調べ始めました。

A氏：何もないと考えた時に企業に就職することなどほかのことを考えず大学教員（になろう）となったのですか？

筆頭著者：サッカーの方は、這い上がろうという気持ちというのは全然薄れていなくて、姿勢とかそういうのは全く変わってないけれども、自分はサッカーを失った時に何も持っていないなというのをすごく感じました。

大学生の時に、漠然とですけども、大学に関わりたいなというのをすごく思いました。

A氏：それはなぜでしょう？

筆頭著者：僕は高校までユースチームにはいたけれども、高校までほとんど試合に出られませんでした。ただ、大学に入って、それも技術的に上手くなったというわけではなくて、周りとのコミュニケーションを取って、連動して（プレーを）やっていたら、自分も輝けるということを知ってからうまく（事が）行き出して、プロに大きく近づいたという経験があったので。コーチというよりも、なにか教育者として関わりたいなとはすごく思っていました。ただそれはちょっと漠然としていて、別に大学教員がどういうルートで行かないといけないとかは正直に言うとならなくて、ただ、大学は研究機関だということはわかっていたので、やっぱり大学院だなと思ったのがきっかけです。

A氏：(K1)大学の影響が大きかったのでしょうか？

筆頭著者：はい、そうだと思います。学業とサッカー両方で組織としてしっかりしていた大学だったので、学業もサッカーも、周りの学生からいろいろなことを学び続けることができ居心地が良かったのだと思います。

B氏：高校の教員とかの選択肢は全然浮かばなかったですか？

筆頭著者：イメージとして高校の時の感覚はすごく子供で、頑張ることだけで物事を済ませていました。でも大学で色々なことが頭で整理されて物事を解決していくということを覚えるようになったので、その世代は自分が経験したことなので、何か教えられることがあるなと思いました。

B氏：もう少し遡ると、プロに入った時と、プロで試合に出ていた時はJ1に行きたいという気持ちがあったのか、もうJ2で試合出られているところで満足だったのかはどうだったのでしょうか？

筆頭著者：プロに入る前も、入った後もJ1でやりたい

(プレーしたい)という思いはすごくありました。希望に満ち溢れていました。

プロ6年目に受けた初めての解雇通告後について

A氏：(プロ6年目に)解雇になってすぐに修士号(経営学)を取っていますが、これはなにか悲壮感みたいなものがあったのでしょうか？

筆頭著者：すごくありました。修士課程なので、授業もたくさん受けて研究もしてはいたのですが、やっぱり本腰はサッカーに置いていたので、ある意味、ダラダラと受けていた感じでした。ただ、いざクビ(解雇)になって初めて挫折を味わって、選手を失ったら本当に自分には何もないと思いました。そこでまずはこの修士号(経営学)を取らないといけないとスイッチが入りました。修士号(経営学)を取った後もその時の影響があったので、このまま学びを継続していこうということで、移籍後(プロ7年目)も(体育・スポーツ学の)博士課程を調べ始めました。

A氏：サッカーの試合に出られなくなったときに、このままではまずいと、大学院の学業を頑張って、試合に出られるようになったらその気持ち薄れていくのを繰り返していたような感じでしょうか？

筆頭著者：そうですね。ただ、Oクラブの時は試合の出場によって気持ちが変わっていましたが、Kクラブ(プロ2チーム目の所属クラブ)に行ったら博士課程に入ってから学会とか、先生方に指導を受けたり、ゼミの仲間の発表とかを聞きながら、研究者としての心得というか、そういうものが身につけていきました。なので、学業の方の熱量がなくなることはありませんでした。ただ、Oクラブの時と一緒に(学業に)フルバットができていたというわけではなかったかもしれないです。

B氏：1回目の解雇の時に、別の道に進もうとは考えなかったのでしょうか？経営学修士号を取っていたら、28歳だとまだ企業の選択肢も十分あると思います。

筆頭著者：そうですね。(一回目の)解雇になった時にまずは修士号を取ろうという気持ちでいて、その時にKクラブからオファーが来てサッカーができる、まだサッカーで上を目指したいと思ったので、そういう道(別の道)を考える前に、ことが進んでいきました。

博士課程進学以降の経緯について

B氏：他者からの助言みたいなものもあったのですか？
大学院行ったほうが良いのではないかと、博士課程
に行ったほうが良いとか、外から助言みたいなものはな
かったのでしょうか？

筆頭著者：そうですね。それが全くありません。全部自
分で調べて大学院（博士課程）に行くことを決めました。
ただ、Kクラブをクビ（解雇）になった時に、いろいろ
な人に相談して話を聞いてもらって、そこで大学教員に
なりたいたとは思っていました。

A氏：（大学教員になる）決断みたいなものは、Nクラブ
（プロ3チーム目の所属クラブ）に行く前ぐらいだった
のでしょうか？

筆頭著者：Nクラブに行った時には、ある程度、大学教
員に進みたいとは思っていました。（Nクラブで）現役
（選手）をしながら非常勤講師も勤めだしたので。ただ、
それでも自分が大学教員に進むと最終的に決断したの
は、現役を引退した時でした。非常勤講師として勤めて、
自分には（この仕事が）合っていると思ったし、大学生
を教えることがこの先の道として良いとやりながら
（勤めながら）そういう気持ちは大きくなっていきまし
た。Nクラブにいた時は（Nクラブ運営小学生対象サッ
カースクールで）週に1度のコーチも始めて、サッカー
をプレーするのと「教える」のは全く別物だなと感じて、
「教える」感覚を掴むために良かったことでした。また、
Nクラブでスクールコーチをしていたことで、（サッ
カーを）辞めて1年間は（民間の）スクールでコーチと
して雇ってもらうことにつながったので良かったです。

プロサッカー選手が大学教員へ移行するためのキャリア
のつなぎ方について

A氏：（プロサッカー選手が）大学教員になる気持ちが
あるようだったら、長期にわたる計算をしないと就職で
きないから、少しずつ大学院を長期履修していけば、大
学院でお金を払わないといけなくはなけれども、ある種
の（就職の）保険のようなものにもなるし、大学からプロに
なった選手は、（大学教員になる）可能性があると思いま
した。

筆頭著者：Jリーグにはセカンドキャリア支援制度があ

ります。年間で最大20万円の（支援を受けられます）。私
も大学院のお金の大部分をそれで払っています。

A氏：その制度のことは選手みなさん知っているのだ
でしょうか？

筆頭著者：はい、セカンドキャリアに向けた資格取得な
どの活動に対して支援金が出るという説明を受けます。

A氏：Jリーグでこのようなこと（大学院に行くこと）
を現役中にやっている人はいるのかな？

筆頭著者：デュアルキャリアとして、ビジネスとかを始
めるというのは、僕がJリーグにいた時には、もう当た
り前になっていたの、他のこと（サッカー以外のこと）
をやっている人はいました。ただ、大学院に行っていた
人は周りにはいなかったです。

現役引退の経緯について

A氏：Nクラブの2年目に非常勤講師を勤めてNクラブ
2年目に退団が決まって、ここでもうすんなりと（選手
を）辞めようと思ったのでしょうか？

筆頭著者：そうではありませんでした。Nクラブではこ
の年に（JFLで）優勝して一応試合にはある程度絡んで
いて身体も動いていたので、やっぱりまだやりたいなっ
ていう気持ちが正直ありました。それでも、（シーズンが）
終わってまあ数ヶ月過ごす中で、自然と、「ここが辞め時
だな」と思いました。いざ引退を決めた後は、今思うと
もっと早く（選手を）辞めても良かったなって思うほど、
今は大学教員としてキャリアを積むことに努めたい気持
ちが強く、未練は何もありません。

IV. 考 察

1. Role-Exit Model を手がかりにした対象者の
キャリア移行の段階

Ebaugh (1988) は Role-Exit Theory と呼ばれる、キャ
リアにおいて役割を基準に、役割を終えて次の役割に移
行するまでの期間を分けて説明した理論を展開してい
る。上代・野川 (2013) は Role-Exit Theory について、第
1段階は、ある職業に就いてから、その職業に自分が向
いているのか否か、または続けていけるのかななどの不安
や疑問を感じる段階、第2段階は、現状への不安や疑問

非自主的な引退

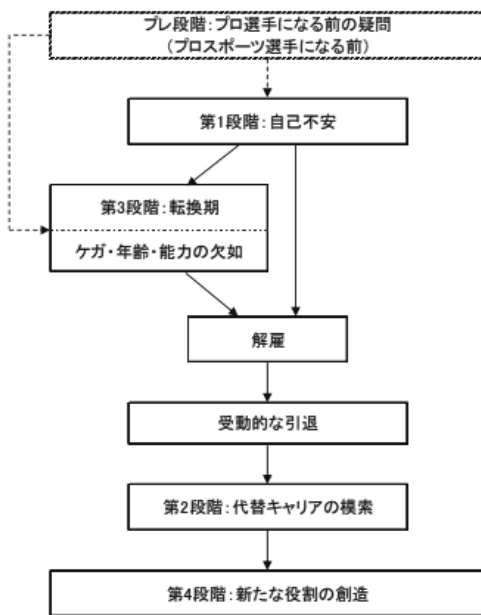


図1 修正 Role-Exit Model

出所：(上代・野川, 2013) より抜粋

が高まり、次の職業を模索する段階、第3段階は、人事異動やリストラ、あるいは疾患などを理由に転職が現実的になる段階（転換期）、そして、転換期を迎えて新しい職業に就くまでが第4段階であると説明している。その上で、24名の創成期のプロサッカー選手への質的研究を行い、解雇通告を受けて非自主的に引退した選手の多くは、第3段階の転換期を迎えてから、次の職業を模索し始めており、いわゆる第3段階に遭遇した後に第2段階を経験するというように順序が入れ替わっていたことを明らかにしている。そして、Role-Exit Theory をアスリート用に援用した Role-Exit Model (Drahota・Eitzen, 1998) を元に、日本人プロサッカー選手のプロセスに合った修正モデル(図1)を作成している。筆頭著者は、解雇通告を受けて引退した非自主的な引退のプロサッカー選手であり、修正モデルに該当していると考えられる。

Ebaugh (1988) の Role-Exit Theory は、プロサッカー選手から大学教員へのキャリア移行のプロセスを段階的に論じることが可能で、かつ、特定の役割からの離脱だけでなく新たな役割の獲得過程における実践知の構築にも焦点を当てるため、大学教員としての教職アイデンティティの形成過程を分析する上で有用であると考えられる。

そこで、逐語化したインタビュー内容を元に共著者と共に検討を行い、選手としてのキャリアについて、役割を終えて次の役割に移行するまでの期間の段階を分けることとした。筆頭著者は、選手生活で3度の解雇通告を受けており、その都度、意識の変化が顕著に見られたた

め、解雇通告の時期を境に段階を分けるのが妥当であると考えた。その中で、筆頭著者のキャリアにおいては、非自主的な引退選手について(上代・野川, 2013)が示した修正 Role-Exit Model のキャリアの順序と同様に、第3段階の転換期を迎えてから、第2段階の代替キャリアの模索をしていたと考えられる。ただし、修正 Role-Exit Model においては、受動的な引退後に代替キャリアの模索が始まるとされているが、筆頭著者は、セカンドキャリアに向けた活動を現役中に進めており引退直後には、第4段階の新たな役割の創造期に掛かっていた。以下では、これらの段階に沿って考察した。

・プレ段階（プロになる前）

筆頭著者は、中学高校期に満足に試合に出場できなかった経験に反して大学期では試合に出られるようになり、成功を体験したと想起している。成功経験に対する自伝的推論は、アイデンティティの確立、自尊感情、人生満足度との間に有意な相関が示されている(佐藤, 2017)。大学期に学習習慣や社会性を身につけ試合に出られるようになった強い成功体験から「プロに大きく近づいた」と同時に、大学卒業後「大学に関わりた」と、アイデンティティの確立までとはいかないものの、大学教員としてのアイデンティティが芽生え始めたと考えられる。

また、教員採用内定者への調査では、教師の志望動機の構造には「子どもが好き」、「教師という職業への憧れ」などが深く関わっていることが報告されている(藤原, 2004)。しかしながら、筆頭著者は、自身の「プロに大きく近づいた」成功体験に紐づきながら、「色々なことが頭で整理されて物事を解決していく」という大学の教育的価値に興味を抱いていると考えられる。憧れから教職を希望している学生よりも、教職や教育の価値に着目して教職を志望している学生の方が、教育実習を通して教師としての効力感やアイデンティティを発達させる傾向があるという研究(田中, 2020)もあり、こういった考え方が後の教職アイデンティティ形成に影響を与えているかもしれない。

ただし、アスリートは、デュアルキャリアに対する関心が薄く、自らの運動能力を向上させる傾向にあり(Ryba et al, 2017)、筆頭著者も、プロ選手になりたい気持ちが先行しており、大学期はアスリート引退後のキャリアに対する思考はほぼ皆無であったといえよう。

・第1段階 自己不安（プロ1年目～プロ6年目1回目の解雇通告前まで）

前段階において教職アイデンティティの芽生えが見ら

れたが、あまり抱いていなかったデュアルキャリアへの意識に変化があったのは、入団してからプロサッカー選手に対しての不安を覚えたプロ1年目だといえよう。その原因として、ライフバランスの変化と、限定的な試合への出場機会があると考えられる。荒井ほか(2018)は、アスリートのライフバランスに関する競技生活と競技以外の生活についての充実を促進する要因に、「バランスを取ろうとすること」と、どちらかに軸足を置き「バランスを取ろうとしないこと」という背反する両者の心がけがアスリートへのインタビューから抽出されたとしている。筆頭著者は、「今まで大学まで部活と大学の勉強を両立してきていたのに、いきなりサッカーだけの生活になりました。それなのに試合に出られなくて、すごく不安になりました。」と、サッカーだけに注ぐ生活に不安感を覚えており、それまで学業とサッカーを両立しバランスを取ろうとしていたことが、ライフバランスになっていたと説明がつく。また、筆頭著者の語りから、プロ1年目と4年目に試合への出場が限られていたことが、上代・野川(2013)の修正 Role-Exit Modelにある現状への不安や疑問が高まる理由となっていると推察される。

近年は、現役中から競技引退後どう生きていくか考え計画を立て準備をする「デュアルキャリア」の概念が主流となっている(高城ほか, 2019)。10年以上前に存在していた「競技以外の何者であることも許されない」状況(小島, 2008)はなく、現役中に引退後のキャリアについて考え行動を起こすのは不自然でない風潮であったと考えられる。しかしながら、「大学教員がどういうルートで行かないといけないとかは・・・そこまで詳しくは調べていなくて」という筆頭著者の語りから、大学院(修士課程)に通い始めた理由は曖昧でとても詳細に引退後のキャリアについて考える余裕はなかったことがわかる。

・第3段階 転換期(プロ6年目1回目の解雇通告後～プロ9年目2回目の解雇通告前まで)

筆頭著者の語りより抽出された「挫折」について神原(2008)は、主観的価値、特に達成価値を感じていたことに対して失敗をし、その際に無力感や絶望感を感じることを定義できる可能性を示している。その上で、和ほか(2011)は、アスリートの挫折時の心境を、競技を続けるか葛藤している心境であるとしている。プロサッカー選手に対する解雇通告は、競技の強制的な非継続を申告され、それまでの培ってきたアスリートとしてのアイデンティティが大きくゆらぐ可能性のある事象であるといえる。筆頭著者は、プロ6年目の解雇通告によって一時的にアスリートとしてのアイデンティティを失い、「選手を失ったら本当に自分には何も無いと思いました。」と、

自身が職業的なアイデンティティを他に何も持っていないことを自覚するようになった。2クラブ目(Kクラブ)の入団が決まった後は、セカンドキャリアの方針は定まっていないものの、他の職業的なアイデンティティをつかみとりたいという意欲が芽生え修士号を着実に取得した要因となったと考えられる。また、修士号を取得したことで、博士課程進学を選択肢が生まれ、選手として上を目指す傍ら、選手としての活動に負担にならない自然な流れで博士課程に進学が可能となったことがわかる。

坂井(2011)は、大学教員は常に自分自身に固有の研究課題を保持し、それを追求し続けなければならないとしている。筆頭著者は、博士課程に入学し、他の研究に触れる機会が増えたことで、「研究者としての心得というか、そういうものが身につけていきました。」と、大学教員としてのあるべき姿を理解しつつあったと考えられる。

・第2段階 代替キャリアの模索(プロ9年目2回目の解雇通告後～プロ11年目選手引退まで)

教職や教育の価値に着目して教職を志望している学生は、教育実習を通して教師としての効力感やアイデンティティを発達させる傾向にあることが報告されている(田中, 2020)。また、教育実践経験に対する自伝的推論という内的な省察過程は、教職アイデンティティにつながることも示されている(佐藤, 2021)。教育実習経験がなく大学教員を志した筆頭著者は、大学時代の経験を回顧し工夫しながら勤めた非常勤講師としての実践経験が「自分には(この仕事が)合っていると思った」と、教職アイデンティティを大きくした要因となっていると考えられる。このことは、教育の価値に着目して教職を志す社会人にとっても、初めての教育経験が教職アイデンティティを発達させる可能性があることを示している。

また、スポーツ指導を行っている教員はスポーツ指導者としての自覚や役割を認識し、指導者アイデンティティを高めることで、意欲的にスポーツの指導を行うことができる(八尋・萩原, 2019)とされている。「『教える』感覚を掴むために良かった」という筆頭著者の語りからも、コーチとしての経験が指導者としてのアイデンティティを発達させたと考えられる。現役中から教職アイデンティティの足掛かりとして指導者としてのアイデンティティを形成した重要な機会であった。ヨーロッパ各国においては、現役中からアスリートが引退後に必要なスキルを補うための支援制度が充実していることが報告されており(吉田ほか, 2007)、Jリーグにおいても、現役中よりコーチングライセンスを取得するためのJ

リーグ選手を対象とした講習会や、セカンドキャリア関連の教育訓練費用を就学支援金として負担する制度がある^{注1)}。筆頭筆者も現役活動中に大学院進学・在学の経費やコーチングライセンスの取得のために支援金を活用した。しかし、女子バスケットボール選手を対象に行った調査ではそういったアスリートの引退後のためのキャリアサービスが活用されていない現状が明らかになっている(古殿・畑岸, 2018)。それ故、大学教員へキャリア移行するにあたって、セカンドキャリア関連の教育訓練費用を積極的に活用することは重要と示唆される。

また、非常勤講師として教育した経験により初めて、教職アイデンティティが大きくなり、大学教員へのキャリアへ進むことが明確になったことがわかる。それは選手としてのキャリア最終年であった。教職のアイデンティティ・ステータスが早期完了で、早々に教職としてのキャリアを決断している学生は、教育を行う者として指導できるのかなど教職に適しているのか自己を問い直すことができない傾向にあることが示されており(岩佐ほか, 2019)、段階を踏みながら教職アイデンティティを育み、大学教員のキャリア選択決断に至ったのは、筆頭筆者にとって適切な順序と期間であった可能性がある。

・第4段階 新たな役割の創造(現役引退～大学常勤教員着任まで)

まず、筆頭筆者は、現役引退を決断する直前に、一時的にはあるが現役選手への執着や未練がのぞかれる。しかし、現役引退を決断した後は、アスリートとしてのアイデンティティを失ったことで、新たな職業的なアイデンティティの定着にこだわりを持った。田中(2005)は、オリンピックであった自らの経験を元に、アスリートがセカンドキャリアへの移行がうまくいかないのは自分が選手ではないという喪失感にうまく対処できないことにあるという。筆頭筆者の事例からは、アスリートが引退時に新たな職業的なアイデンティティを保持できた際の効果として、より強固なアイデンティティを創造できる可能性や、アスリートとしてのアイデンティティに対する喪失感や未練を早々に無くす期待を示唆している。

教師の進路決定プロセスと教師のアイデンティティの関連について調査した研究(松井・柴田, 2008)では、学校卒業後、別の職業より転職し教職に就いた「転職型」は、本来なりたいたと思った職業があったが、教職についての「途中変更型」や、どの職業に就きたいか自分自身の希望が不明確なまま教職についての「なりゆき型」に比べ、教師としてのアイデンティティが強固であることが示さ

れている。プロサッカー選手から教職へのキャリア移行は「転職型」に該当すると考えられ、確かな意思がある転職ならば強固な教職アイデンティティを形成できると考えられる。しかし、引退後の進路決定プロセスによっては、「途中変更型」や「なりゆき型」に該当すると捉えることもでき、教職アイデンティティ形成が未成熟なまま教職に就く場合も十分に考えられる。筆頭筆者の教職アイデンティティがどれほどの熟達度があるかは定かではないが、アスリートとしてのアイデンティティを失っていることも相まって強固になっており、大学教員として勤める現在も維持している。前述したように、教員はアイデンティティがゆらぎやすい(山田・長谷川, 2010)ため、代替キャリアの模索期においては、着実なアイデンティティの形成が必要であると考えられる。

2. 対象者のアイデンティティ形成の変容とその契機

筆頭筆者のキャリアを分析すると、結果としては、大学期に周りの学生に影響を受けながら、学習習慣や社会性を身につけ試合に出られるようになった強い成功体験から教職アイデンティティの芽生えがあり、大学に関わりたという漠然とした動機をきっかけに修士課程(博士前期課程)への進学、博士後期課程への進学、非常勤講師への着任、常勤講師への入職と、それぞれの活動がキャリアパスとなった上で、デュアルキャリアを歩んでいた。強固な教職アイデンティティを増進させたのは選手としてのキャリア終盤以降であったけれども、むしろ盤石な教職アイデンティティ形成には適切な時期であった可能性がある。それにより、プロサッカー選手を引退した際には、自らのキャリアプランを直ちに描いたと考えられる。

図2は、筆頭筆者の教職アイデンティティの形成とその契機を、濱本(2021)を参考に示している。筆頭筆者は、大学教員として必要な大学院での研究活動や非常勤講師として勤めた教育活動をきっかけに教職アイデンティティを育てていることがわかる。プロサッカー選手がスムーズに大学教員へキャリア移行をするためには、長期間にわたり多くの研究と教育のステップを踏む必要があると示唆される。

また、図3は、インタビュー内容をもとに共同研究者と議論し、それぞれの職業的アイデンティティレベルの推移を記録した。ここでの職業的アイデンティティレベルとは、職業を通してどれほど自己を認識しているのか主観的感覚の到達割合を指す。100%はアイデンティティにおける4つの下位側面である自己斉一性・連続性、対他的同一性、対自的同一性、心理社会的同一性(谷, 2001)を職業において完全に満たしていることと

アスリートアイデンティティ

指導者アイデンティティ

教職アイデンティティ

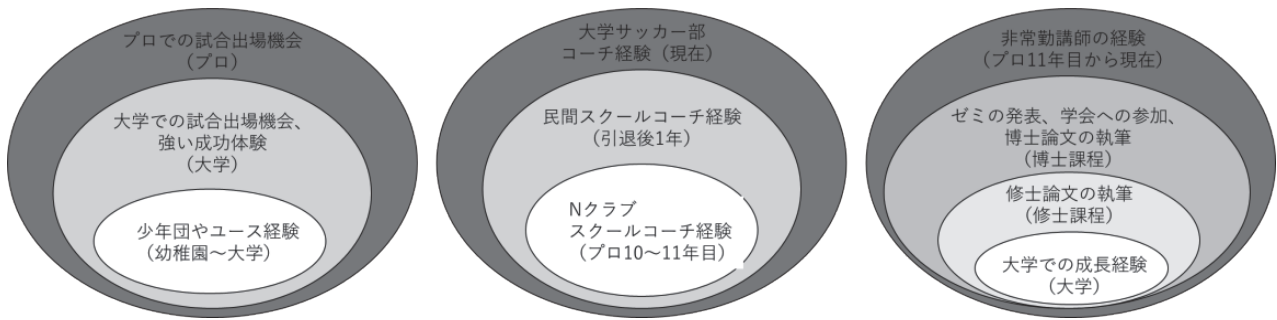


図2 筆頭著者のアイデンティティ形成とその契機 (筆者作成)

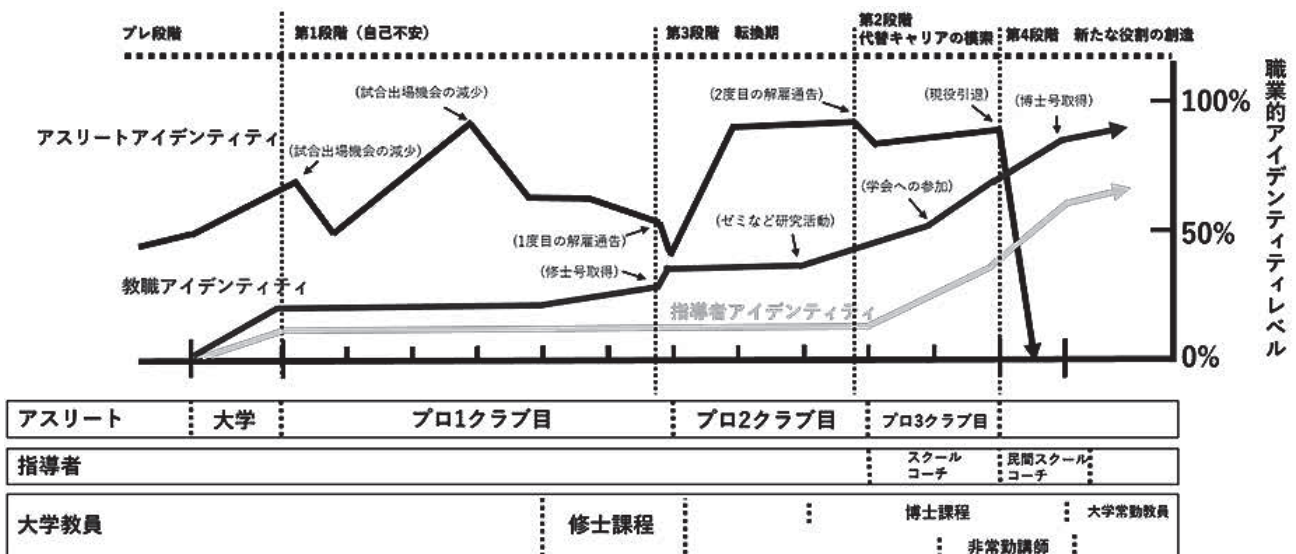


図3 主観的アイデンティティレベルの推移 (筆者作成)

なる。図下には、筆頭著者が就いたアスリート、指導者、大学教員それぞれに深く関連する経歴の変遷を表で示し、アイデンティティレベルの推移と対照している。図3によると、プロ6年目に1回目の解雇通告を受けて以降は、アスリートアイデンティティが失われる度に、教職や指導者としてのアイデンティティが増進している。また、アスリートアイデンティティの回復契機となっていることがうかがえる。インタビューの分析も踏まえると、アスリート、指導者、大学教員、それぞれの職業的アイデンティティを保持していたことで、補完的關係を構築し自我同一性が保たれていた可能性がある。特に、引退直後には、指導者としての役割を担う中で得られた自己認識が、教職アイデンティティの形成に大きな影響を与え、教職アイデンティティの基盤が形成されていたため、アスリートアイデンティティの急激な喪失による弊害を抑え、明確に目的意識を持った状態でセカンドキャリア移行することができたと考えられる。

ただし、練習生やプロサッカー選手契約3年未満といった若年層のプロサッカー選手の多くが数年の契約でプロ選手引退を余儀なくされ(田蔵, 2018)、競争に勝つために毎日の練習に取り組む中で、引退後の生活について思考し行動することは難しいと推察され、現役中から大学院への進学をするのが困難な状況も大いに考えられる。また、大学教員を目指すには、研究、教育両面で数多くの段階を踏む必要がある。筆頭著者が危機感を持ち全力を注いでようやく学位を取得したように、とりわけ学会誌に論文を掲載した上で認められる学位論文を執筆することは簡単なことではない。よって、現役中にすべての行程を終え引退後にすぐに大学の常勤教員として着任するのは極めて難しいといえる。

日本プロサッカー選手会事務局によると、約1700名の全Jリーグクラブ所属選手に対して2022年度のセカンドキャリア支援金申請件数は、318件であった^{註1)}。申請件数は、同一選手が複数回申請している場合も含まれ、実

際には20%以下のJリーグクラブ所属選手しかセカンドキャリア支援制度を利用していないのが現状である。筆頭著者は、学業費用の多くを支援金で賄い、デュアルキャリアを歩んでいた。大学教員へのキャリア移行は長期にわたる研究と教育のステップを踏む必要があると示唆されるため、このようなキャリアサービスを活用し、経済的な負担や不安も解消することもスムーズなキャリア移行につながると考えられる。

V. 結 語

本研究では、プロサッカー選手であった筆頭著者の、プロサッカー選手から大学教員へのキャリア移行についてセルフスタディにより事例的に検討し、プロサッカー選手が引退後にスムーズにキャリア移行する上でのヒントとなる知見を導き出すことが目的であった。

筆頭著者は、長期にわたる研究と教育のステップを踏み、アスリートと指導者としてのアイデンティティも着実に形成しながら、強固な教職アイデンティティを形成していた。大学教員へのキャリア移行は長期的にキャリアプランを描く必要があり、Jリーグのキャリアサービスを活用しながら、引退時のアスリートアイデンティティの喪失を補完する教職アイデンティティの基盤を形成することが望ましいだろう。

本事例は、筆頭筆者の単一事例をできる限り客観的な視点がかかるよう考慮し共著者と議論し共同で行った。しかし、セルフスタディゆえに客観的視点を担保するのは限界があり、大部分を主観的な視点に頼っている。また、事例においては明確なキャリアプランなき活動がセカンドキャリアの選択肢を狭めた可能性や、そもそも、現役中でのセカンドキャリアへ向けた活動がアスリートとしてのキャリアにどのような影響があったのかについては検討されていない。それでも、本研究は大学教員へのキャリア移行を検討するプロサッカー選手がこれから歩みを進める上でのヒントを呈示できたと考えている。

今後はより多くのプロサッカー選手の教員へのキャリア移行の事例について、アスリートのキャリアを含めた多角的な視点での検討が望まれる。特に、引退後の進路決定プロセスが「途中変更型」や「なりゆき型」(松井・柴田, 2008)に該当する事例を検討することで、進路決定プロセスによる場合分けが進むと考える。それにより、プロサッカー選手が教員のキャリアへスムーズに移行できるような指針が示されることを期待したい。

注 記

注1) インタビュー内容を踏まえ、Jリーグのセカンドキャリア支援制度の実態を把握するため、日本プロ

サッカー選手会事務局に照会を行った。Jリーグにセカンドキャリア支援制度が存在することと、セカンドキャリア支援金申請件数に関するデータの公表について同意を得ている。

文 献

- 荒井弘和, 深町花子, 鈴木郁弥, 榎本恭介 (2018) 大学生アスリートのスポーツ・ライフ・バランスに関連する要因 — デュアルキャリアの実現に向けて. スポーツ産業学研究, 28(2) : 149-161.
- Drahota, J. A. T., Eitzen, D. S. (1998) The role exit of professional athletes. *Sociology of Sport Journal*, 15(3), 263-278.
- Ebaugh, H. R. F. (1988) *Becoming an ex: The process of role exit*. University of Chicago Press.
- Erikson, E. H. (1959) *Identity and the life cycle*. Psychological Issues Monograph, Vol.1. New York: International Universities Press. (小此木啓吾訳編 (1973). 自我同一性, 誠信書房).
- 藤原正光 (2004) 教師志望動機と高校・大学生生活: 教員採用試験合格者の場合. *教育学部紀要*, 38 : 75-81.
- 濱本想子 (2021). 剣道を専門種目とする初任教員教育者のセルフスタディ: アスリートアイデンティティと教育者アイデンティティの連関. *名桜大学紀要*, (26) : 59-70.
- 羽田貴史 (2011) 大学教員の能力開発をめぐる課題. *名古屋高等教育研究*, 11 : 293-312.
- 飯尾哲司, 藤岡成美, 舟橋弘晃, 間野義之 (2023) エリートアスリートはなぜセカンドキャリアで教員を選択したのか: 「プロ野球選手」と「Jリーガー」の事例をもとに. *スポーツ産業学研究*, 33(1) : 63-73.
- 岩佐康弘, 杉村和美, 田爪宏二 (2019) 教員養成課程の大学生における教職を目指す過程での再考及び理想の教師像への志向性とアイデンティティ発達との関連. *青年心理学研究*, 31(1) : 19-33.
- 神原知愛 (2008) 大学生の挫折経験に関する心理学的考察 — 挫折観をもとに —. *日本教育心理学会総会発表論文集*, 50 : 451.
- 金子明友 (2002) *わざの伝承*. 明和出版: 東京.
- 和秀俊, 遠藤伸太郎, 大石和男 (2011) スポーツ選手の挫折とそこからの立ち直りの過程: 男性中高生競技者の質的研究の観点から. *体育学研究*, 56(1) : 89-103.
- 金鍾成, 弘胤佑 (2018) 社会科教育学と歴史学におけるコラボレーションの意義と可能性 — 2人の大学院生による授業改善のセルフ・スタディー —. *日本教科教育学会誌*, 40(4) : 13-24.

- 北崎悦子, 會田宏 (2018) テニスのグラウンドストロークにおけるショットのコンビネーションに関する実践知: 国際レベルで活躍した女子テニス選手の語りを手がかりに. 体育学研究, 63 (1): 421-431.
- 古殿幸雄・畑岸邦枝 (2018) デュアルキャリア教育のためのWJBL引退者調査. 日本知能情報ファジィ学会ファジィシステムシンポジウム講演論文集, 34: 150-155.
- 小島一夫 (2008) あるアスリートのキャリアトランジションに伴うアイデンティティ再体制化について—生涯発達心理学の視点から—. 研究紀要, 14, 73-85.
- 劉麗鳳 (2016) 教師の教職アイデンティティに関する一考察—日本と中国農村中学校の比較から—. 21世紀東アジア社会学, 2016(8), 164-181.
- Loughran, J. J. (2004). A history and context of self-study of teaching and teacher education practices. In *International handbook of self-study of teaching and teacher education practices* (pp. 7-39). Dordrecht: Springer Netherlands.
- 松井賢二, 柴田雅子 (2008) 教師の進路決定プロセスと職業的アイデンティティとの関連. 新潟大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 教育実践総合研究, 7: 141-159.
- 光岡奈緒 (2014) プロサッカー選手のセカンドキャリア: 諸外国と日本のプロサッカー選手のセカンドキャリア支援事業. 国際経営・文化研究, 18(2): 67-78.
- 望月慎之, 横山勝彦 (2005) スポーツ選手のセカンドキャリアに対する環境整備: Jリーグキャリアサポートセンターの試みを中心として. 同志社保健体育43: 1-26.
- 岡村美由規, 祝迫直子, 前元功太郎, 山本佳代子, 河原洸亮 (2022) 高校教員にとって異動という経験がもつ意味: 自己を研究対象にするセルフスタディを用いた探索的研究. 学校教育実践学研究, 28: 93-104.
- 大場ゆかり, 徳永幹雄 (2000) アスリートの競技引退に関する研究の動向. 健康科学22: 47-58.
- 大坂遊, 渡邊巧, 岡田了祐, 齊藤仁一朗, 村井大介 (2022) 教師経験の乏しい教師教育者はどのように教師を育てることと向き合うのか: 初任期にセルフスタディに取り組んだことの意味. 周南公立大学論叢, 1: 23-46.
- Ryba, T. V., Zhang, C. Q., Huang, Z., & Aunola, K. (2017). Career Adapt-Abilities Scale-Dual Career Form (CAAS-DC): Psychometric properties and initial validation in high-school student-athletes. *Health psychology and behavioral medicine*, 5(1): 85-100.
- 齋藤眞宏. (2021) 教師教育におけるセルフスタディ: 日本
 の学校教育におけるその意味の考察. 旭川大学経済学部紀要, (79-80), 147-163.
- 坂井昭宏. (2011) 教育 = 研究一体性論の再検討: 大学教員のアイデンティティ. 桜美林論考. 人文研究, 2: 17-30.
- 桜井厚・小林多寿子 (2005) ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門. せりか書房: 東京.
- 佐藤浩一 (2017) 成功経験と失敗経験に対する自伝的推論とアイデンティティ発達. 適応との関連. 認知心理学研究, 14(2): 69-82.
- 佐藤浩一 (2021) 教育実践経験に対する自伝的推論と教職アイデンティティ—成功経験と失敗経験に着目して—. 群馬大学教育学部紀要, 人文・社会科学編, 70: 207-216.
- 高橋潔, 重野弘三郎 (2010) Jリーグにおけるキャリアの転機—キャリアサポートの理論と実際. 日本労働研究雑誌, 52(10): 16-26.
- 高城佳那, 三倉茜, 小笠原悦子 (2019) コーチになれるという自己効力感とスポーツ版自己調整学能力との関係—女子バスケットボール選手を対象として. スポーツと人間: 静岡産業大学論集, 3(2): 43-49.
- 谷冬彦 (2001) 青年期における同一性の感覚の構造 多元自我同一性尺度 (MEIS) の作成. 教育心理学研究, 49(3): 265-273.
- 武田信子 (2019) 教師教育者になる. ジョン・ロックラン監修・原著, 武田信子監修・解説, 小田郁予編集代表, 齊藤眞宏・佐々木弘記編集, Jロックランに学ぶ教師教育とセルフスタディ—教師を教育する人のために—. 学文社: 東京: 149-161.
- 田蔵奈緒 (2018) プロサッカー選手のキャリアサポート—欧州と日本のプロサッカー選手のセカンドキャリア支援事業—. 共栄大学研究論集, (16): 83-94.
- 田中希穂 (2020) 教職課程への動機づけが教育実習後の教師効力感・教師アイデンティティにおよぼす影響. 同志社大学教職課程年報, 9: 21-33.
- 田中ウルヴェ京 (2005) キャリアトランジション—スポーツ選手のセカンドキャリア教育. 日本労働研究雑誌, 537: 67-69.
- 豊田則成, 中込四郎 (2000) 競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化の検討. 体育学研究, 45(3): 315-332.
- 上代圭子, 野川春夫 (2013) 日本人元プロサッカー選手のキャリアプロセスに関する研究 自主的な引退と非自主的な引退に着目して. 生涯スポーツ学研究, 9 (1-2), 19-31.
- 八尋風太, 萩原悟一 (2019) スポーツ指導者のアイデン

ティティーに関する研究：尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. 運動とスポーツの科学, 25(1) : 35-41.

山田哲也, 長谷川裕 (2010) 教員文化とその変容. 教育社会学研究, 86 : 39-58.

吉田幸司, 河野一郎, 吉田章, 菊幸一, 相馬浩隆, 三宅守, 片上千恵, 佐伯年詩雄 (2007) トップアスリートのセカンドキャリア構築に関する検討 (第2報) 海外先行事例調査を中心に. 筑波大学体育科学系紀要30 :

85-95.

吉田毅 (2006) 競技者の転身による困難克服の道筋に関する社会学的考察：元アメリカ杯挑戦艇クルーを事例として. 体育学研究, 51(2) : 125-138.

(令和6年7月4日受付)
(令和6年11月30日受理)